

「日本酒を通じて地域の活性化を図りたい」という思いを込めて、上川大雪山酒造の代表取締役社長（中）が、酒蔵を訪れて話している様子。



- 1955年 前身の酒造会社が三重県四日市市で創業
- 2016年 本社と酒蔵を上川管内上川町に移し、商号を「上川大雪酒造」に変更
- 17年 上川町に「緑丘蔵」が完成し、酒造を開始。地域限定酒「神川」の初仕込み
- 19年 吟風で仕込んだ特別純米酒が18年度の新酒鑑評会（札幌国税局主催）の純米酒の部で初めて金賞を受賞
- 20年 帯広畜産大と協力し、大学構内に「碧雲蔵」完成
- 21年 函館市内の小学校跡地を活用し、「五稜乃蔵」が完成
- 22年 21年度全国新酒鑑評会（酒類総合研究所など主催）で上川大雪酒造の3蔵すべての出品酒が入賞

上川管内上川町に2017年、「緑丘蔵」を開業し、酒蔵から始まる地方創生に取り組んできた。北海道産米で賞の高酒を造り、観光を地元中心にする中で観光客を呼び込む。酒の評判がまちの知名度を上げ、住民の地元への誇りも高めた。

代表取締役社長は札幌出身で、小樽商科大を卒業後、野村証券に勤務した。外資系金融機関などを経て、12年にフレンチシェフの三田清三さんと上川町

酒蔵で地方創生 上川大雪酒造

（上川町）

内のレストランを開設。冬に客足が落ちることから、通年で安定した事業を模索していた時、旧友に酒造りを提案された。旧友の実家は三重県で酒蔵を営んでいたが、販売不振で休業状態だった。国は供給過剰への懸念から、日本酒醸造の新規参入を事実上、認めておらず、この酒蔵の免許を移転する形で酒蔵の開設が実現した。

そこで意識したのは、自社だけがもうけるのではなく、地域全体の活性化につなげることで、

20年には帯広畜産大の構内に「碧雲蔵」、21年には函館市内の「五稜乃蔵」が完成。相次いで酒蔵の建設が計画されている。上川町で確立した地方創生のノウハウが、各地に広がりはじめている。

（徳永）

販路限定 地域に人呼ぶ